

書評

MSW の実践知の結晶

〔評者〕 炭谷 茂
恩賜財団済生会理事長

村上 須賀子・竹内 一夫(編)

『医療ソーシャルワーカーの力 —患者と歩む専門職—』

済生会は、明治天皇によって102年前に創設された。生活困窮ゆえに医療を受けられない人に対して医療サービスを提供するために設立された。

社会保障制度が充実した今日でもこの役割は、最近の社会経済状況から著しく増大している。精神障害を抱えた若いホームレスが目立つようになった。増加している刑務所出所の高齢者の前には厚い社会の壁が遮る。中には糖尿病、肝臓病などの疾病を持つ人もいる。これらの人に対して済生会は、平成22年度から「なでしこプラン」を策定して援助を行っている。

この中心を担うのがMSWである。他の病院と同様に、患者の受診・受療援助、退院調整などMSWの業務は、病院の機能分化等に伴い増大している。済生会のMSWは、ここ2～3年多忙になった。病院ではMSWの増員を行っている。全国的なMSWの研修会を2年前から実施し、体制の飛躍的な強化を図っている。

＊

私は、MSWの人と仕事をしながら、MSWのあり方、業務はいかにあるべきかを考え込むことが多い。MSW事業は、戦後GHQによって公的に導入された。長い歴史にもかかわらず、日本の医療・福祉制度の中で明確な位置づけがなされず、医療、福祉関係者からも理解されずに今日に至っている。その理由の1つはMSW事業の理論化、体系化が遅れていることにある。

本書は、この問題を解決するのに大きな力になる。2006年6月以来『病院』誌には現場で勤務するMSW

が執筆し、実務によって獲得した実践知が集積されている。毎月の50もの論文が1つに編集された結果、MSW事業論の体系を見事に形成している。理論化に必須の業務から得たエビデンスが提供されている。

受診・受療援助、退院援助、地域活動などMSWの事業の柱を網羅し、現在必要性の高まっている地域連携、臓器移植など医療倫理に係わる仕事、さらに病院組織での位置づけ、経営への参加も取り上げているので、7年前からの連載を基にしているにも拘わらず、本書の内容をアップ・トゥ・デートにしている。

実務家が執筆しているだけに大変実践的である。分析も深い。文章は、いずれも明快である。大学生にも十分理解できる。現在業務に携わっているMSWにも大変有益である。

各章に村上須賀子、竹内一夫両教授によって総論的に解説が加えられているのは、専門外の人にとって理解の手がかりになる。この部分にもっと紙幅を使ってもよかったのではと感じた。



B5判 頁232 2012年 2,500円＋税5%
日本医療ソーシャルワーク学会発行
医学書院販売 ISBN978-4-260-70086-3